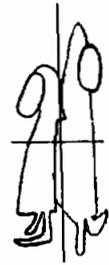


会報



◇史学会総会 五月二十五日 於六〇一教室

一九八三年四月に設立された奈良大学史学会の第一回総会が行なわれた。史学科主任兼会長菅野先生のあいさつのあと、史学会会則、本年度役員人事および予算が提案され、それぞれ原案どおり承認された。また、今後の予定として十月八日(土)に橿原市今井町の見学会を実施するという計画も発表された。

一九八三年度の役員は、つぎのとおり。

▽会長 菅野 正 副会長 (本年度は不置)

▽監事(会計監査) 松山 宏 堀内 一徳

▽教員委員 鎌田道隆(運営・編集) 青木芳夫(会計)

水野柳太郎(庶務)

▽学生委員 永田 洋 印牧信明 岩田信彦 山田

真宏 森元文子(以上四回生) 村上温子 八十田由

美 成瀬美絵 松田 幸 山本淳子 成田憲司(以

上三回生) 小原浩美 浜田京子 中西淳子(以上二

回生)

◇春季講演会 五月二十五日 於六〇一教室

史学会の発会記念講演会と史学科特別講義を兼ねて、史学会・史学科共催の春季講演会が開かれた。講師は岡山大学教授直木孝次郎氏で、演題は「私の古寺巡礼」。定員三百十余名の六〇一教室が超満員となり、なお数十のパイプ椅子が持ちこまれるほどの盛況のなか、午後一時半から九十分におよぶ講演は、直木先生の若き日の奈良古寺めぐりのあれこれを親しく語られたもので、聴講者に多くの感銘をあたえた。

◇今井町見学会 十月八日

史学科特別講義と史学会野外活動を兼ねて、今井町見学会を十月八日実施した。近鉄八木西口駅に午後二時集合したのは、総勢四十余名。予想では、数百名の大部隊となり混雑するのではということであったが、規模としてはまずまず。松山先生の先導で、一同称念寺へ向う。称念寺では任職の今井博道氏による今井町の歴史と町並み保存に関する講演が、約一時間ほどあった。称念寺を出て、今井の町

並み見学に出発。もしや小雨にと心配された天気も、一行のマナーのよさに感応してか良好。豊田家は屋内に入つて、奥西家は屋外から見学。一時間あまりの急ぎ足の見学であったが、モデルコースをひととおりは通ることができた。四百年の歴史をもつ今井の町並みであるが、とりわけこの数年の変化がかなりきわだったものであるとの感懐を深くした。

◇会員動向

東洋史(前近代)担当の森田憲司先生が、奈良大学教員国内研究として、東洋史の史料調査・収集のため、一九八三年四月一日から九月三十日まで、六カ月間、国内留学された。

昭和五十八年(三月・九月)史学科卒業論文

〔考 古〕

縄文時代の広場について

岡本 欣子

木製農耕具の研究

小倉みどり

— 弥生時代を中心にして —

弥生時代における墓制の展開からみた古墳

の発生

弥生時代高地性集落の研究

— 大阪湾沿岸とその周辺を中心として —

古代日本における家犬に就て

— 縄文時代を中心に —

弥生時代青銅器工房の研究

— 銅鑄を中心として —

縄文時代埋甕の研究

古墳時代葬制の研究

弥生時代の流通について

— 吉備系土器を中心として —

シシガキの考古学的研究

縄文時代の葬制の研究

弥生・古墳時代墳墓の研究

瓦質土器の研究

群集墳出現前後の墓制の研究

集落から見た方形周溝墓の研究

〔日本史〕

コノハナサクヤヒメについて

小田 和利

尾田 弘之

川上 富子

草野 誠司

久保寿一郎

高野 学

竹本 聡美

千代田秋充

徳竹 雅之

中納久美代

奈良 俊哉

服部 文章

前原 節子

嵐 友樹

律令体制下の地方豪族と農民

—郡司制の成立と展開を中心に—

池本 恭子

古代における皇太子の経済的基盤

—美濃国安八磨郡湯沐邑を中心に—

野原 邦代

『隋書』倭国伝記載の秦王國について

伊藤友紀子

古代の皇位継承法

—「大兄」の意義について—

伯井 幸代

古代瀬戸内海の海運についての一考察

井上 宝

陵戸考

羽鳥 準

和風證号を中心とする尊号について

浦田 明彦

律令制と隼人

東野 信義

僧綱制の起源について

岡田 昌子

—大隅・薩摩にみえる隼人の反乱—

福井 直裕

班田收授法における一考察

河崎 潔

古代社会における婚姻

水島 進

—西海道戸籍からみた班田收授法について—

川嶋 広幸

—形態と社会が与えた影響—

村上 万里

古代の軍事制について

小坂田育子

古代吉備国におけるミヤケについて

森下 清貴

—靱負に関する考察—

谷川 都

古代の交易について

山崎 浩紀

『六国史』における喪葬儀礼について

津村 正樹

—造東大寺司の交易形態を中心として—

山田 寿

平安時代の軍事制度

鄭 喜斗

飛鳥時代の政治について

中葉 博文

—押領使の成立—

寺尾 京子

律令時代における祥瑞思想について

源平争乱期における源義経

畿内における渡来氏族の一考察

寺田 素子

奈良朝末期の廢后・廢太子

梅崎 敬司

—説話伝承成立論—

永田 行男

—井上皇后事件とその背景—

☆ ☆ ☆ ☆

古代における貨幣流通とその背景

源平争乱期における源義経

—難波から飛鳥に通じる道—

☆ ☆ ☆ ☆

天智朝の政治について

源平争乱期における源義経

—難波から飛鳥に通じる道—

☆ ☆ ☆ ☆

—庚午年籍を中心にして—

源平争乱期における源義経

—難波から飛鳥に通じる道—

☆ ☆ ☆ ☆

定額寺について

源平争乱期における源義経

—難波から飛鳥に通じる道—

☆ ☆ ☆ ☆

国人平賀氏の領主支配の変遷

恵谷 剛

源平争乱期における熊野水軍

岡本 徹

—熊野別当湛増を中心に—

中世大和の被差別民衆

金田 直樹

—五ヶ所・十座—

戦国期における河野氏の動向

河野 浩二

—河野氏の滅亡について—

室町初期における摂津型荘園の動向

桑原 直樹

—東寺領摂津国垂水荘の在地支配をめぐる抗争を中心に—

鎌倉開府前後における三浦氏の動向

小峰 義行

—「吾妻鏡」にみる三浦氏—

戦国時代における毛利氏の動向

地現 純一

越中守護代の諸問題

戸田真佐子

—畠山氏の内紛をとおして—

六角氏の権力構造に就いて

中野 和彦

—六角氏式目を中心に—

南北朝期の小笠原氏について

藤沢 千恵

—小笠原政長の管国経営—

☆ ☆ ☆ ☆

近世初期における農政について

安達 正晃

東海道三島宿の構造

久保 秀年

—幕末宿場財政破綻に至る諸要因の考察—

近世大坂における商業的地位の確立

河野 敦子

—米穀流通を通しての一考察—

キリスト教の伝来と受容の構造

小杉 俊介

幕藩制成立期における奈良奉行について

杉本 仁子

幕末政治思想における後期水戸学 성격

竹村 こそえ

幕末における初期民族主義の形成

辰見 和子

知行支配を通してみた近世大名の成立

谷藤 富保

近世初期における朝幕関係

友高 尚美

—天皇と幕藩体制—

江戸幕府の成立と西日本支配について

松井 啓三

—徳川家臣団の配置と変遷—

幕藩体制成立期における二元政治について

森岡 俊雄

近世在郷町と酒造業の関わりについて

藪内美佐子

—摂津国伊丹を中心として—

☆ ☆ ☆ ☆

第二次大戦後の高度成長

浅井 啓司

一九二〇年代における文化運動

足立 正明

太平洋戦争前における日本軍部の抗争と開

戦への影響

大谷 雅彦

不平等条約への対応

愛媛における自由民権運動と岩村県政の展開

戦後保守党の政策(路線)転換

婦人参政権運動

戦後日本の復興期における経済政策

戦前期における軍部の動向と政府の対応

綿織物業にみる日本の産業革命について

—静岡県(遠江国)を考慮にして—

日本陸軍の国家総力戦段階への対応

明治二〇年代における民衆意識の動向

大正期以降における産業組合の展開

—奈良県添上郡治道村の場合—

日本資本主義成立過程における一考察

〔東洋史〕

元代の東西交通について

中国皇室の女性史

西方の諸ハン国について

—カフカズ紛争に関する一考察—

契丹民族史

奥野 敏彦

兼平 剛

鎌田 勉

福村 恵子

藤原 和幸

益 良平

松下 德行

松宮千世子

森元 文子

宮本 真路

山下 宣夫

寺岡 智子

西村 裕子

能阿弥明美

橋向 俊晴

☆ ☆ ☆ ☆

清代慈禧について

華僑と中国革命

—辛亥革命前の華僑の活動について—

アヘン戦争について

—林則徐を中心にして—

〔西洋史〕

ギリシアの奴隷制について

—奴隷制の果たした役割—

エジプトの王権観について

—第一中間期による王権観の変化について—

四世紀ローマ帝国の宗教

古代におけるギリシア人の生活と演劇

ギリシア神話

アレクサンドロス大王の東方遠征について

ギリシアの神託

—最盛期のデルフォイの神託を中心として—

海洋商業民族フェニキア人

セウエールス朝期におけるローマ帝国

ギリシア文化の側面

—彫刻にみられるギリシア美術の特質と変遷—

長谷川俊浩

松永 洋

山本 健

石田 桂子

井原 時美

江口 輝明

斉藤 雅子

佐藤 裕信

島宗 千恵

当山 雅律

成平 清

伯野 栄嗣

藤永 須正

☆ ☆ ☆ ☆

古代ギリシアの民衆の活動についての考察

—重歩兵階級をめぐって—

シュメル人の発明について

中世農業革命と庶民の生活

古代エジプトにおける王権観について

—神王理念の形成とその変遷—

ヴァイキング的精神の一考察

古代エジプト

—ピラミッドのできるまで—

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

カロリング国家の形成

啓蒙思想の展開

中世イギリスの王権と初期議会

西欧中世初期の商業と都市

—北西ヨーロッパを中心に—

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ナチズムの興隆とその支持基盤

本間香奈子

毛頭 宗春

森本 厚子

横島 雅恵

米満みゆき

迫田 敦

☆

石田 厚子

猪原 真也

川井 由夏

菊池 意幸

☆

梶並 浩三

編集後記

◇奈良の街も、野も山も、一面の銀世界となった。十二月に入って二度目である。なお、雪は舞う。身のひきしまる思いがする。寒さのせいばかりではない。厳肅な気持で、『奈良史学』を世に送り出したいという願いも重なっている。

◇多くの方々の協力を得て、なんとか第一号の刊行にまでこぎつけることができた。学問的水準は高く、教育的効果にも配慮したいという希望が、編集部にはある。第二号、第三号と号を重ねることで、さらに充実をはかりたい。

◇『奈良史学』は、単なる論文発表の場ではない。学内における研究活動への刺激と、学外との交流、そこに主たるねらいがある。史学会の発展のため、ご助言をお寄せ戴ければ幸いです。

奈良史学 第一号

一九八三年十二月発行

奈良市宝来町一二三〇

奈良大学文学部内

発行者 奈良大学史学会

会長 菅野 正

電話 〇五三〇四一二五(代)

振替 大阪九一三一九四九番

印刷所 (有)藝林美術出版社